

第一圖 背紋を研ぎ出した初期の鏡

い所謂内区には、前者の二つの葉形の先端を中にして左右に向い合、體軀の曲りねらせている龍を大きく表わし、その外廻りに更に相似た細長い龍を添えて、兩者を巧みからませて主區を飾る。そして外邊を幅廣い雄勁な一種の渦雲紋帯で縁取っているのは、

圓い鏡背紋として整然としたものである。主要なその龍紋は古い動物紋の傳統を承けながら、華雲紋的な趣を同時に併せ示すという特色を示している。而も是等の構圖を普通の古鏡としては寧ろ稀な金銀錯の手法で、兩者を巧みに使ひわけて平な鏡地の面にやゝ盛り上つたように表出したもので、更に龍の雙眼なり體軀の一部に珠玉を嵌入して色彩上の美しさを加え、それに色漆をも添え用いると言ふ技巧が併せ用いられてある。

三

是等の構圖のうちでの鈕周辺の四葉形は、漢代の座飾に最も多いものであるが、それは鈕

— 既にもとの面が剝離しながら、また金銀錯紋を施した形迹を僅かに下邊にとどめている — の本より四出する葉形が蠶蠶狀に左右に擴がるという一つの型をとつたもの、この四葉形は金の雙線縁で縁取つた輪郭内を、渦雲の同じ縁紋でうすめてあり、葉間には正しい格調の針篆で、もと「長且子孫」なる吉祥句を一字宛配した。この銘はいま中の「子」の字を除いた三字が認められる。なお葉形の渦雲紋の中央に、もとそれ／＼葉形の玻璃を嵌入したことが、葉形の一つに風化しながら遺存、他の二者にも脱離した凹みがあることで知られるのである。

次に兩側から見るように雙龍の繰返したことの認められる主要な圖象は、口を開き牙齒をむき出して相對する。その龍頭の一方は長い獨角であり、他は雙角である。既に尖なわけてあるが、龍の雙眼には共に嵌玉した形迹をとどめて、凹んだその部分は暗赤色の色漆がこる。體軀は右の頭部を一廻りする著しく圖案化した細長いもので、肢脚と共に全く渦雲的になつた華やかな線態を示し、中での鋭い白銀の爪が目立つ。これは洛陽金村古墓の掘開から明らかになつた戰國時代後半の金具の裝飾紋に見るところと相似て、一層洗練したアラベスク風の趣を呈したものである。第二圖はその細部の寫眞である。右の節帯狀の體軀には、また雙眼と同様な嵌玉がある。玉の形は一様でないが、淡緑色の玉を凹められた面に嵌め込むに先立つて色漆を施し、玉を透したその色彩上の効果の豫め考えられたことを示す技巧のもの。この原形は玉の既に脱離し去つている個所の凹みの一つに可なり濃い赤漆と認められるものがよく残つている。同じ外邊に布置した龍の眼の嵌玉では、同じ色漆で青色玉の周邊を縁取つているのが見られる。主要な四龍の外方の龍形また全く同様なものであるが、縁帯に沿ひ間隙に應じた横に長い姿態をとつている。殘存するのは口を開いた横向きのものと、眼をいからせて正面を向いた龍形とで、兩者は内の主な龍紋と巧みな布置をなし、全く間然するところがなくて、恰も龍首のみのやゝ目立つ特色の豊かな渦雲様たる觀を呈する。なお外縁を飾る幅廣い紋帯はS字狀を根幹として、それに渦紋を絡ませた、もと龍形から出て、而も一つの著しい特色を示す單位圖紋を連ねたものである。この金錯紋は線に肥瘦があつて恰も描いたような趣が見られる。

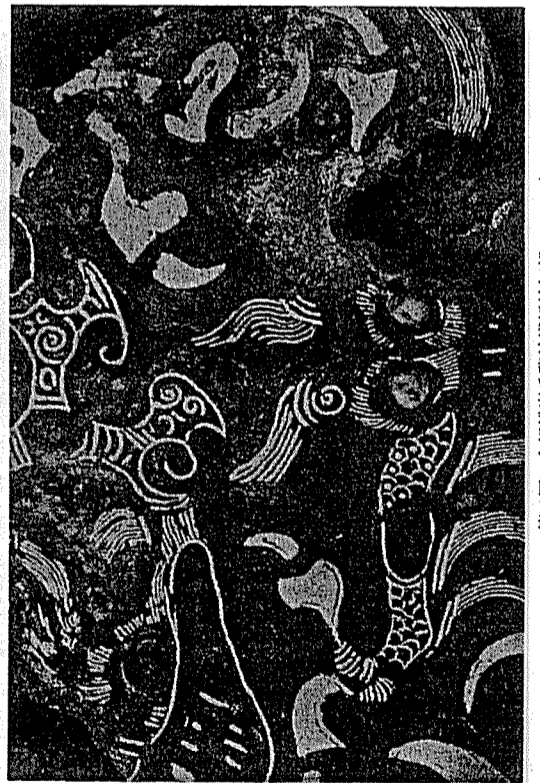
このような實物の示すところからすると、新たに知られたこの珍らしい鏡も戰國時代より

中國に於いて盛行していた鏡の裝飾として時代の進んだ技術の數々をその上に驅使して背面紋を仕上げた優れたものであること、そして近年著しく知見を加えた中國の工藝作品類に於ける戰國時代に入つてからの劃期的とも見られる象嵌に依る裝飾の技術上の知見を、その鏡の實際の示すところと併せ觀ることに依つて、作られた時期の前漢時代に溯ることが自から認定されることである。

四

前漢代の一鏡例と認められる新たに知られた本遺品に於いて、恰も漢代が後の隋唐代と並んで特に古鏡が盛行したことであり、また戰國の世から工藝品の裝飾に象嵌技術の多用された時代であるにもかかわらず、現存の夥しい當代の白銅鏡に、なお象嵌鏡がなく、普通の鏡と違つた鐵製の鏡にこの顯著な例を見る點は、一見奇異なこととして自から鏡の全體の上でその性質が顧みられる可きであろう。此の場合作られた鏡の質料のそれと聯關するものゝあるのが考えられることである。

さてこれまで知られた古い銅製の鏡で、背面を象嵌紋で飾つた遺品としては、時代の戰國後半に溯る洛陽金村古墓群出土の狩獵紋鏡と、龍龍廻紋鏡が知られていて、細川家蒐儲の前者が殊に著明である。然るに同鏡は作りが二重體で、映像の面が白銅であるのに対し、象嵌は他の青銅の部分の上に施されてあること、他の多くの工藝品と同様である。他の一鏡の質もまた白銅質と言ひ難いものである。中國の漢代鏡を特色づける銅七〇パーセント、錫三〇パーセントの合金より成る白銅は、質は硬いが脆く粘性を缺いて鑄成が容易でないと共に、それに象嵌を施すにも難がある。これが白銅質の鏡の完成した漢代を通して象嵌紋の行なわれなかつた所以であつたらうと觀ぜられる。それに對して鐵は性質の上で鑄成で色々な工藝品を作るに適しない面があると共に、鍛造されたものにあつては、象嵌の前提としての彫紋が可能であ



第二圖 金銀錯嵌珠龍紋鏡鏡紋細部

る。これが漢代のこの鏡にそれが見られる所以であるであらう。

一般に中國の古鏡と言ふと銅鏡のみが擧げられて、鐵鏡の並び行なわれたことに對する關心に乏しい。併し中國に鐵鏡の行なわれたことは、古く宋代の『博古圖錄』に多數の唐代の遺品を著録しており、實物も今世紀に入つて漢文化の波及した西域・韓半島北部の遺跡から出土して、それ等の時代の遡るものであることが認められた。尤も新たに土中から出た遺品は殆んどすべて酸化して背紋などの見分け難くなつたものであつた。但し三十年代に入つて